

「渴」について

渡部 栄輝

日本鍼灸研究会

「渴」はのどが渇き水を欲する状態を示す言葉で、『内経』においては、傷寒や瘧といった外邪性の熱病の内攻（陰への侵襲）、又は蔵府（主に脾と腎）の熱により生じる症状の意味で使われている。

また、病名としての「消渴」も、わずかに1条ながら『素問』中に見える。『傷寒論』『金匱要略』『脈経』においても、同様に内外傷の熱が「渴」発症の基本的な要因とされるが、新たに小便、嘔吐、下利、体内の水の停滞など水分代謝の面から、「渴」の機序の理解に多少の展開が見られる。ただ、後漢三国時代までの「渴」は、記述の内容や量からも特に重視された病証とは思われない。

隋唐代では、まず『諸病源候論』（以下『病源』）が、「消渴候」「渴病候」「渴利候」など「渴」に関する8項目を「消渴病諸候」として一括し、それまで単なる症状としてのみ扱われていた「渴」を、初めて一つの病気の中に位置づけた。「消渴病諸候」は『病源』全70病門中、「風病諸候」「虚劳病諸候」「腰背病諸候」に次ぐ四番目に位置する。これ以後、医学書の病門には必ずと言っていいほど「消渴門」が収録されることになる。

「消渴病諸候」8項目に共通する病態は、石薬の服用の影響で下焦に生じた熱もしくは蔵府の虚実から生じた内熱による、津液の減少とそれに伴う腎の傷害である。その結果として、腎が水を制御できず排尿に異常をきたす。ただし「消渴病諸候」には、「渴」を生じず、単に小便が多量に出る「内消候」や精液が漏れ出てしまう「強中候」も含まれている。すなわち、上述した津液不足と腎の機能異常によって生じる諸病証を「消渴病」として一括したものであり、「消渴病」では「渴」の発症は必ずしも条件とされていない。

「消渴病」は、唐代以降、「三消」（「消渴」「消中（または中消）」「腎消（または消腎）」）の問題として展開された。

北宋から南宋・金にかけて、「消渴」「消中（または中消）」「腎消（または消腎）」の「三消」が設定され、広義の「消渴」として一括された。「消渴」「消中」「腎消」が包括的に論じられたのは、『外台秘要方』所引『古今録驗』の「消渴病有三。一渴而飲水多，小便数，無脂似麩片甜者，皆是消渴病也。二吃食多，不甚渴，小便少，似有油而数者，此是消中病也。三渴飲水不能多，但腿腫脚先瘦小，陰痿弱，数小便者，此是腎消病也」であり、これを「三消」と命名したのは、『太平聖恵方』である。

『太平聖恵方』『聖濟総録』『三因極一病証方論』では、『古今録驗』や『病源』「消渴病諸候」から抽出される「渴と小便の関係性」に注目して論を起し、「三消」を渴不渴（飲水の多寡）と小便利不利（小便の多少）の組み合わせを中心に、多食、小便白濁、小便味甘などの症状を補填して定義しているが、『病源』の「消渴病」に見られるような共通の病態が明確に打ち出されていないこともあって、その内容は各書で一定ではない。すなわち問題は、「渴」を条件としない消中や腎消を広義の「消渴」に帰属させた理由が曖昧であることは、「消渴」の概念はさらに複雑化させた。

これに対し、金の劉完素は、三消を上中下三焦と関連付け、狭義の「消渴」を「上消」と再定義し、『素問』に見られる「鬲消」をこれと同一とみなし、「三消」はすべて燥熱に起因すると主張した。この学説は「消渴」の認識を一定程度整序するものであったから、後世の医書に度々引用された。

明代以降、「消渴」についての記述は、『内経』の「消瘴」「鬲消」などの条文、『病源』の病態に関する記載、劉完素の説を中心に、過去の医書からの引用に終始した。しかし、歴史的に変遷する病態概念を包括的に把握するには、過去の論述の羅列ではなく、変遷の過程を追う必要があると思われる。